

希望の年 — 震災ボランティアの若者3人が語る

2011年3月11日——。東北地方に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。

「テレビの映像は現実なのか」「今こそ若者が動く時だ」と京都からもたくさんの方々が東北入りし、あまりに大きな事態と向き合いながら、自分自身の生き方を問い返しました。

今回は震災ボランティアとして活躍する若者3人に、社会と自分の「これから」について語っていただきました。

「自分が動かねば」の思いに突き動かされて

牧口直人さん（NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、立命館大学政策科学部3年生）



高校生の頃、有名人が途上国を訪問する番組を見て「現状を知ってなぜ何もしないのか」という疑問を持ち、そこから国際協力に興味を持って、大学入学後IVUSAに参加しました。でも、最初に派遣された国内の災害救援が転機となりました。足元の日本、若者が少ない地域から動くことが大切だと分かったんです。以後、豪雨、台風、雪害の救援で全国各地を回りました。今回の震災では、石巻市や気仙沼市でのガレキ撤去、「いわてGINGA-NETプロジェクト」での仮設住宅サロンなど、さまざまな活動に取り組みました。岩手から帰った翌日には台風の被害を受けた三重県に駆けつけました。バイトで稼いだお金はすぐ飛びますが、「自分が行かなければ」といつも思うんです。特別な専門性を持つわけではない学生の強みは、話しやすいし何でも頼みやすいというところ。ボランティアとは「支援」ではなく、そこに住む人たちと話をし、一緒に汗を流すことだと思います。気仙沼と一緒に活動した地元の高校生から、別れぎわに「震災を絶対に忘れないで」といわれたのが頭に残っています。震災を風化させないという視点でも、活動していきたいと思っています。



社会の本当の「当事者」になるために

横関つかささん（龍谷大学ボランティア・NPOセンター、同大学法学部4年生）



私は大阪府出身で、阪神・淡路大震災のときは5歳でした。断片的な記憶もあります。大学に入り、新しく何か始めようと思って偶然出逢ったボランティア・NPOセンターで活動してきましたが、センターはまさに阪神・淡路大震災でボランティアの機運が高まって組織化されたもの。当時たくさんの方が動いたから、いまの活動拠点がある。そう考えたら、いま私たちが動くときじゃないかって思ったんです。ちょうどNPO法人ユースビジョンでインターンをしていて縁もあり、「いわてGINGA-NETプロジェクト」の事務局を務めました。私がいっしょに岩手に行った参加者は200人。ボランティア自体が初めてという学生も半数近くいました。どこにでもいる普通の学生が、社会課題の最前線に立つ経験をしてきたんです。でも参加した学生から、京都に帰ってきて友達に「こんなこと感じてきてん！」っていつても通じなくて悔しい、という声も耳にしました。これまでも漠然と、人と関わる仕事に就こうと考えてはいましたが、学生と社会との接点をつくり、社会の若き当事者をサポートしていききたいという思いが強くなりました。



自分ができることを、継続的に

阿部誠也さん（あつまっぺ！実行委員会、京都薬科大学薬学部3年生）



僕は福島市出身ですが、3月11日はスタディツアーでカンボジアにいました。ツアーを続けるか躊躇しましたが、家族の無事が確認できたこともありそのまま留まりました。帰国後、ガレキ撤去で相馬市に行きましたが、京都に戻って普通に生活していることに違和感を覚えたんです。そこで震災関連のイベントに参加するうち、東北に縁もゆかりもなかったはずの人たちが奮闘する姿を見て、自分もできることをやろうと決めました。インターネットで、自分の住む地域に福島からの避難者が多いと知り、あつまっぺ！実行委員会に参加しました。母親と子どもだけの自主避難が多く、子どもの勉強が心配とのニーズが挙げられたので、学習支援に取り組んでいます。いま、100LBSという団体で100日毎の継続的な募金活動していますが、長期的に活動するには小さな団体が乱立するより、「あつまっぺ！」のように様々な団体がネットワークを組むことが必要だと思います。また、被災地で薬剤師の活躍をあまり聞けなかったことが残念でした。将来は、課題に対して機敏に動けるような薬剤師になりたいと強く思いました。



取材後記

三者三様の想いを聞いて感じたのは、震災を自分の問題として受け止めることの大切さでした。私たちもユースサービスの役割を再認識し、若者とともに希望を持って新たな社会像を模索していきたいと思っています。

（下京青少年活動センター ユースワーカー 上原裕介）